

ガンダーラ彫刻と仏教

内記 理

京都大学文化財総合研究センター 助教

はじめに

ガンダーラ彫刻は、写実的なギリシア彫刻の影響を受けて誕生したものではない。ヘレニズム文化を東方に伝えたといわれるアレクサンドロス大王が、インダス川流域にまで到来したのは紀元前4世紀後葉であったのに対し、ガンダーラ彫刻が登場したのは紀元後1世紀頃のことであった。また、登場時期のガンダーラ彫刻は、ギリシア彫刻のような写実的な表現方法によってあらわされたものでなかったことが判明している。300年以上の時を経たあとにつくられた、表現方法の異なる彫刻を、ギ

リシア彫刻と結びつけて考えることはもはやできない。

ガンダーラ彫刻はギリシア文化の影響で成立した、とする誤解がまかり通ってきたのはなぜか。それは、ガンダーラ彫刻がいつつくられたかが、これまでに十分に検討されず、また、それぞれの時期につくられた彫刻の特徴が整理されてこなかったためである。

本研究の目的は、ガンダーラ彫刻についての理解を深めるための基礎作業として、ガンダーラ彫刻の制作時期を整理し、ガンダーラ彫刻の歴史上の位置づけを明らかにすることである。

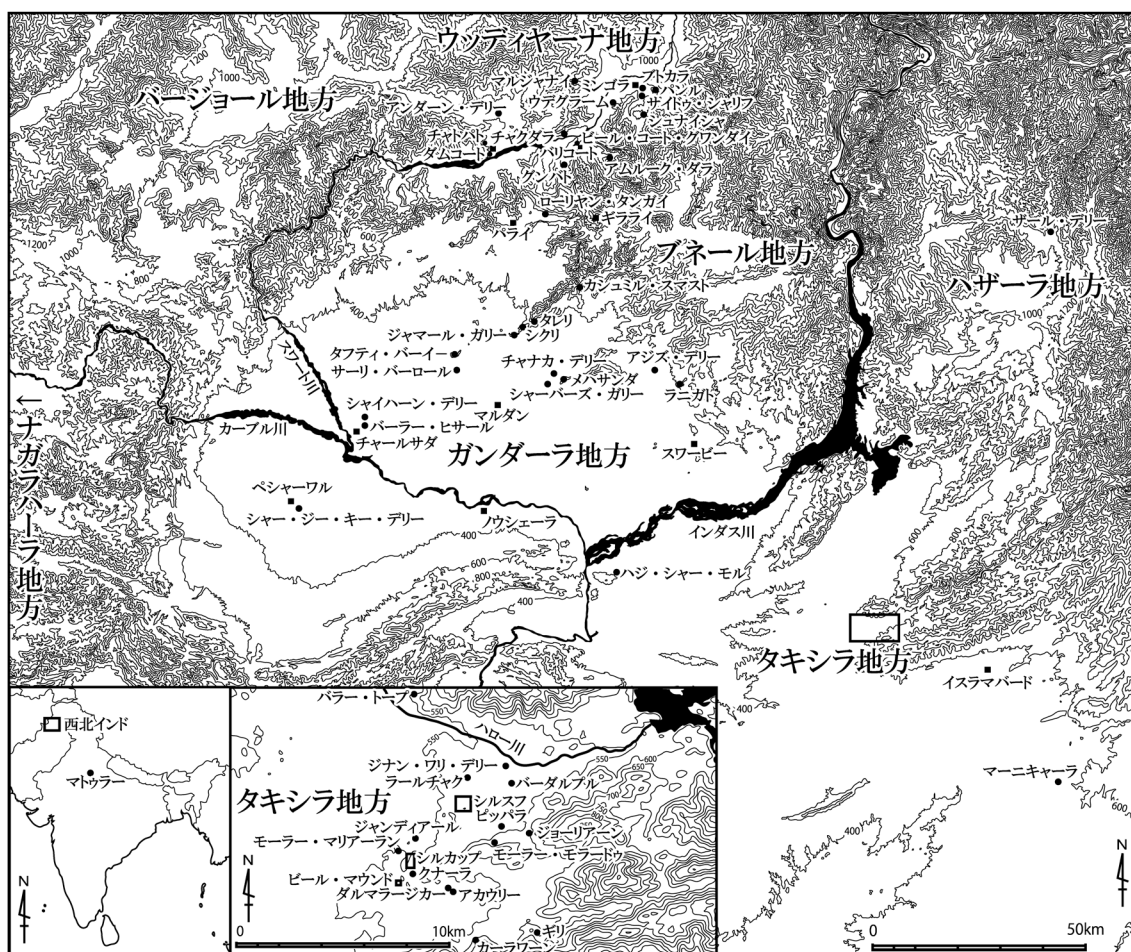


図1 西北インドの地図（内記2016：図1）



図2 西北インドの仏教寺院（内記2016：口絵4-1）



図3 浮彫画像帯（京都大学人文科学研究所蔵）

1. ガンダーラ彫刻の考古学的検討

ガンダーラ彫刻は、西北インド（古代ガンダーラ地方とその周辺。図1）において、仏教寺院を飾るためにつくられた（図2）。

従来、ガンダーラ彫刻の研究は、図像学的な観点からおこなわれることが多かった。彫刻にどのような場面が描かれているかが主要な検討課題とされ、その制作時期については、ほとんど検討されることがなかった。ここでは、美術館・博物館に収められた保存状態の良い彫刻が主な分析対象とされたため、制作時期を考える手がかりが確保されていなかったのである。

ガンダーラ彫刻の制作時期を検討するにあたり、本研究では、遺跡から出土した資料を分析対象とする。彫刻が、どのような遺跡のどのような場所で見つかったかがわかれば、その資料の制作時期を絞り込むことができる。

日本には、現地に調査隊を派遣してきた実績がある。京都大学は、1959年より30年以上にわたって、西北インドの現地調査をおこなってきた。先人達が集めた調査データを活用することにより、ガンダーラ彫刻の考古学的な検討が可能である。

2. ガンダーラ彫刻はいつつくられたか

まずは、ガンダーラ彫刻がいつつくられたかについて考えよう。彫刻を、①様式・②図像・③技法・④碑銘の4つの観点から分析する。

2.1 彫刻はどのように表現されたか

西北インドでみつかると彫刻は、①ぎこちない表現で表されたもの、②写実的な表現で表されたもの、③定型化した表現で表されたもの、の3種類に大別できる。

最も古い段階の彫刻として、ウッディヤーナ地方では紀元後1世紀前半頃のものが、また、ガンダーラ地方では紀元後1世紀後半頃のものが知られるが、それらの表現はぎこちない。

しばらくすると技術は向上し、表現方法は写実的になった。彫刻が写実的に表現されるようになったのは、調査データから明確に指摘することはできないものの、2世紀頃のことであったと考えられる。

さらに、3世紀前半頃になると、彫刻の表現方法は定型化した。

2.2 彫刻に描かれた場面

西北インドの仏教寺院には、数多くのストゥーパが建てられた。ストゥーパの鼓胴部や基壇は、浮彫画像帯によって飾られた。これらの画像帯には、ブッダの生涯を表した物語などが描かれた（図3）。

2世紀後半頃につくられた画像帯においては、場面を仕切るために、人物や円柱が描かれた。またこの頃は、悟りをひらいたあとのブッダの姿が表されることは少なく、主に悟りをひらくまでのシッダールタの生涯や、ブッダの死（涅槃）以後の出来事が題材として選ばれた。この頃にはとくに、「涅槃」の場面が好まれたようだ。

3世紀前半頃になると、場面の仕切りには、主に方柱が用いられるようになった。また、悟りをひらいたあとのブッダによる、奇跡を表した場面や、人々や神々、動物達がブッダに帰依する場面が選ばれるようになった。シッダールタの前世の物語である「燃燈仏授記」の場面や、アショーカ王の前世にかかわる「施土供養」の場面などが好まれるようになったのも、この頃のことであったと考えられる。

2.3 彫刻の接合に用いられた技法

寺院を飾った彫刻のうち、ブッダ像や菩薩像などの単独像においては、前方に突き出た腕が別につくられた（図4）。その腕と、身体部を接合するために、さまざまな技法が用いられた。

当初は、ほぞとほぞ穴を組み合わせた単純な方法が用



図4 単独像の腕（京都大学人文科学研究所蔵）

いられていたが、3世紀前半頃になると、接合のための技法は複雑化した。金属製のかすがいを用いて接合する方法や、蟻ほぞを用いた方法、さらには、それらを組み合わせた方法などによって、腕が接合された。

2.4 奉納年が刻まれた彫刻

ガンダーラ彫刻の中には、制作時期が銘刻されたもの（紀年銘彫刻）がある。彫刻の下端などに、彫刻の奉納年が刻まれたものである。そのような資料として、「179年」の年数が刻まれたスカラー・デリー遺跡出土ハリティー立像、「284年」のパーラートゥー・デリー遺跡出土ブツダ立像、「(2) 89年」のママーネ・デリー遺跡出土彫刻、「318年」のローリヤン・タンガイ遺跡出土ブツダ立像が知られる。

困ったことに、これらの年数がどの時点から数えられるかは、碑銘の中に示されない。そこで、彫刻以外の紀年銘資料を確認すると、そのほとんどにおいて、「アゼス紀元」（暦法の元年は西暦紀元前47/6年）が用いられていることがわかる。よって、彫刻の奉納年も、この暦法で数えたらよい。すると、これらの彫刻はそれぞれ、西暦紀元後132/3年、237/8年、242/3年、271/2年に奉納されたものであることがわかる。

以上の分析から、ガンダーラ彫刻がいつ頃つくられたものであったか、また、それぞれの時期の彫刻がどのような特徴をもっていたかが整理された。とくに注目すべき点は、紀元後3世紀前半頃に、彫刻が大きく変容していることである。この頃に、表現方法や図像の内容、技法が変化した。また、片岩にかわってストウッコ（漆喰）が彫刻の素材としてさかんに用いられるようになったのも、この頃である（図5）。3世紀前半頃に彫刻において、このような大きな変容がみられるのはなぜか。



図5 片岩彫刻とストウッコ彫刻（京都大学人文科学研究所蔵）



図6 西北インドの建物の壁の石積（内記2016：口絵9-1）

3. ガンダーラ彫刻の変容の背景

ガンダーラ彫刻のみを分析しても、変容の理由を探ることはできない。ここで一度、彫刻から視線をはずし、ほかの物質文化をみてみよう。

3.1 建物の構築に用いられた石積の方法

西北インドにおいて、寺院や宮殿、住居の壁は、石を積み上げる方法で構築された（図6）。その石の積み上げ方にも、いくつかの方法があった。切石を積み上げる方法（「切石積」）、自然石を不規則に積み上げる方法（「野石積」）、大きな石の隙間を薄く平たい石で充填する方法（「地文様積」、図6）、地文様積と切石積を組み合わせた方法（「半切石積」）などである。ガンダーラ地方においては、2世紀初頭頃と3世紀前半頃に、石積の変容が確認される。

3世紀前半頃には、彫刻だけでなく、石積においても変容がみられるのである。

3.2 チャナカ・デリーで見つかった王宮遺跡

西北インドでは仏教寺院の遺跡が多数みつまっているが、仏教寺院以外の遺跡も存在する。京都大学が発掘調査したチャナカ・デリー遺跡もまた、仏教とはかかわりのない遺跡である。ここからは、紀元後1世紀後半以前のある時期に建てられた堅固な建物がみつかった。巨大な水槽や列柱の間がみつかっており、王宮であったと推測される。この建物は、状況から判断して、地震によって倒壊したと考えられる。倒壊した時期は、土器などの検討から、紀元後200年頃であったことがわかる。

4. 結論 ガンダーラ彫刻の歴史上の位置づけ

おわりに、以上におこなった検討の結果を踏まえながら、ガンダーラ彫刻の歴史上の位置づけを整理しよう。

ガンダーラ彫刻が登場したのは、紀元後1世紀頃のことである。登場時期のガンダーラ彫刻の表現方法はぎこちない。この頃はちょうど、西北インドで遊牧民の興亡がくりひろげられた時期である。

しばらくすると、彫刻の技術は向上し、表現は写実的になった。年代を明確に示すデータはないものの、クシャーン朝が栄えた2世紀頃のことであったと考えられる。その頃までにつくられた単独像においては、別作りされた腕は、単純なほぞによる方法などで接合されたようである。また、画像帯において、悟りをひらいたあとのブッダは、あまり描かれない。

クシャーン朝のヴァースデーヴァ1世が西北インドを治めていた紀元後200年頃に、ガンダーラ地方は大地震

に見舞われた。王宮や仏教寺院は倒壊し、寺院を飾っていた彫刻は損壊した。王の治世において、仏教寺院の修復作業がおこなわれた。急遽、彫刻を量産する必要が生じたため、彫刻の表現方法は定型化した。同じ理由からこの頃に、処理がより容易なストウッコが彫刻の素材として積極的に用いられるようになった。腕を接合する方法も複雑化し、接合がより頑丈になった。この頃にあらたに制作された画像帯には、悟りをひらいたあとのブッダの姿がさかんに描かれた。

紀元後223年に、西方のイーラーンでサーサーン朝が勃興すると、クシャーン朝の北方領域が圧迫されるようになった。結果的に、クシャーン朝はサーサーン朝に降伏し、西北インドはサーサーン朝の影響下に置かれたようである。ただし、その後の時期のものと考えられる仏教彫刻がみつまっていることから、支配者の交替が同地の仏教文化に大きな影響を及ぼすことはなかったようだ。

謝 辞

この度、拙著『ガンダーラ彫刻と仏教』が栄誉ある三島海雲学術賞に選ばれましたことを、大変光栄に存じます。三島海雲記念財団の関係者の方々、選考委員の先生方、ご指導いただいた先生方・先輩方、また、拙著を推薦してくださいました京都大学大学院文学研究科の井谷鋼造先生および京都大学学術出版会の國方榮二氏に、心より御礼申し上げます。

著者紹介



内記 理 (ナイキ サトシ)

1985年 岐阜県生まれ
 2008年3月 京都大学文学部卒業
 2010年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程修了
 2010年4月 日本学術振興会特別研究員（京都大学）
 2011年4月 ウィーン大学歴史文化学部 訪問研究員
 2013年3月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学
 2013年4月 京都大学文学部非常勤講師
 2013年7月 京都大学文化財総合研究センター助教、現在に至る
 2015年3月 博士（文学）の学位を取得（京都大学）

主要著書：
 『ガンダーラ彫刻と仏教』2016年 京都大学学術出版会